

『しみ』  
酒井章文  
6,214文字

あらすじ

亡くなった祖母の古い家に住む二十三歳の私は、ある日家の柱にしみができていることに気がつく。拭いても擦ってもとれない変色の謎を解くため、あれこれ探ってみる私だが……。

台所の柱にしみができているのに気がついた。マリービスケットくらいのサイズのしみで、その部分だけが焦げ茶色になっている。

元々あったものかしらん？ 一瞬そう思ったけれど、そうじゃない。おんぼろの家なので、いくら汚れがあってもおかしくはない。けれども、そんなところにしみなんてなかったはずだ。

私は記憶をたどってみた。ひょっとして、二日前の深夜一時に春巻きを揚げたときかしらん？

どうして真夜中に春巻きを揚げたりしたのかというと、座布団の上で眠っているはるまきを見ていたら、無性に春巻きが食べたくなってしまったからだ。はるまきというのは飼っている猫の名前だ。毛色が茶トラなものと、仔猫のときに前足と後ろ足をぴんと伸ばして眠っている姿が春巻きに見えたのでそう名づけられた。名づけたのは祖母だ。祖母はもういない。一年半前に亡くなってしまった。

祖母が暮らしていたこの木造平屋にいまは私が住んでいる。間取りは2DKで、駅から徒歩二十分、風呂トイレ別、南向きの物件。築年数はわからないけれど、とても古い。とてもとても古い。というか、ぼろい。二十代の女子が好んで選ばないこと請け合いだ。

どうしてそんなところに住んでるのかというと、お家賃が無料だからだ。祖母が亡くなったあと、遺品整理を手伝った際に、私がここに住む話の流れになった。お母さんは二つ返事でOKしてくれた。母は昔からめんどくさがり屋で、やりたくないことはできるだけ先延ばしにする性質なのだ。この家を売ったりなんたりするのを考えるだけでうんざりしてしまったにちがいない。そしてお金なしの私にとって、お家賃が無料なのはいかなる条件を差し引いても魅力的だった。

そんなわけで私はこの家に暮らしている。

深夜の揚げ物の勢いがよくて跳ねあがったのだとしても、油汚れにしては

位置がやや高すぎる気がした。でもよくわからなかった。正直なところ記憶が曖昧なのだ。というのも、春巻き欲に駆られて、夜中に自転車を飛ばして二十四時間営業のセイユーで足りない春巻きの具材と皮を買い、帰ってきて具材を刻んで炒めて冷まさずに皮でくるんであちちっとなつて、それを熱した油の中に入れるころには若干眠たくなっていたからだ。ほんとうのところ、具材を皮でくるんだときにはもうやめたくなくなっていた。でも初志貫徹が今年目標なので、がんばって春巻き作りを続けた。十本の春巻きを揚げ終えたときにはほとんどどうでもよくなっていた。食べるよりも寝たかった。でもせっかくだからと一口かじったらあまりのおいしさに少しだけ目が覚めた。揚げたて熱々の春巻きのおいしいことといったら！ 眠気なんて軽々と吹き飛ばしてしまう。とはいえ深夜二時に揚げ物をがつがつ食べるのに私のお腹とお腹のお肉が異議を唱えていたので、一本だけ食べて、残りはラップをしてから歯を磨いて寝た。

いまのところ思い当たるとしたらそれくらいしかない。私は台布巾を濡らしてしみのできているところをごしごしと拭いた。でも、拭けど暮らせどはまったくとれなかった。スポンジや激おち君で擦ってみてもだめだった。クレンザーや重層やクエン酸を動員してもまるで効果がなかった。実に頑固な汚れだった。

「おかしいと思わない？」

「べつに……」

私の情熱的な訴えかけに対して、しげこは霜柱みたいにクールに返した。

「しみくらい初めからあったんじゃないの？」

「ぜったいないよ。春巻き九本賭けてもいい」

「胸焼けしそうだから、そんなの賭けなくてもいいよ」

そっけない対応に私がしょんぼりしていると、それを察してくれたのか、しげこは付け足した。

「まあ、そんなに気になるんなら、週末にでも見に行くよ」

「うん。そうして。春巻き五本用意して待ってる」

「四本減ったけど？」

「今日と明日の夕飯のおかずだからね」

やはりしげこは頼りになる。

しげこは大学からの付き合いだ。しげこは「茂子」と書くんだけど、私が頭の中で「茂子」という漢字を思い浮かべながら名前を呼ぶと、彼女のアンテナがぴぴぴと反応して、ちょっとむっとした顔をするので、私は「しげこ」か「シゲコ」と思い浮かべることになっている。しげこは「茂子」という文字面が好きではないそうだ。しげこはデザイン事務所で働いている。美意識に敏感なしげこにぴったりだと思う。

しっかりこっさり社会人として働いているしげこに対して、私は週に三、四日小さな古本屋でアルバイトしているだけの半社会勢力だ。学生時代からのバイト先で、なんとなくずるずると居着いてしまっている。いかんいかん遺憾と思いつつも、生来のぼんやり性も重なって、どうにもこうにもスピードと効率性重視の現代社会に置いていかれてしまっているだめ子なのだ。

それはともかくとして、いまはこのしみが当面の懸案事項だ。私は情報技術を駆使して世界中から妙案を探してみた（つまり、インターネットで検索してみた）。でも、見つかったのはお肌のしみを消すためのサイトばかりだった。そっちのしみじゃないんだよね、と思いつつ辛抱強く探したけれど、いくつか主婦の知恵が得られただけだった。効果的な方法は見つからなかった。

二十一世紀の情報化社会といってもこんなものだ。私はなぜかちょっとだけ得意げに型落ちパソコンの電源を落とした。

この家に引っ越してきたとき、まずやったことはおばあちゃんの遺品整理

だった。お母さんと二人でやった。押し入れや天袋に押しこまれていた埃だらけの物品を仕分けして捨てるのはかなりの大仕事だった。押し入れの奥に行けば行くほど古い品が出土してきて、家はしっちゃかめっちゃかになった。地層を調査する考古学者みたいな気分だった。その中には電気火鉢なる謎の暖房器具まであった。私たちはそれらをせつせと片づけていった。

不要品の処分が終わると、次は掃除だった。堪え性のないお母さんが帰ってしまったので(「自分の家の掃除くらい自分でしなさいよ」と言い残して去って行った)、そこからは私一人でやらないといけなかった。私は携帯用スピーカーで音楽をかけながら、家中をくまなく掃除をした。

おじいちゃんが生きていて、おばあちゃんもまだばりばり元気だったころ、二人はいつも掃除をしていた。きれい好きだったのか掃除好きだったのかは知らないけれど、私が泊まった次の日の朝はいつも掃除の時間だった。

布団を畳んで押し入れにしまうと、おじいちゃんは畳の上に濡らして丸めた新聞紙をいくつか撒いてから箒で掃いた。濡れ新聞紙が埃を吸着するとかなんとか言っていた。それからハタキで長押をパタパタと叩き、絨毯の上を掃除機みたいなやつでごろごろしていた(あれはなんだったのかしらん?)。ちびだった私の記憶にしっかり刻まれるくらい、二人はいつもいつも掃除をしていた。

そんなにしっかり掃除をしていたのに、ちっともぴかぴかにはなっていなかった気がする。元が元だから仕方がないのかもしれない。現代のお家とは造りが違うのだ。それでもきれいになるかどうかは二の次だと言わんばかりに、二人は掃除に励んでいた。

その祖父母の末裔である私としては、故人の遺志を尊重するためにも、しっかり清掃に励まねばなるまい。私は心の鉢巻きをぎゅっと締めて、掃除に取り組んだ。

初夏のうららかな日だった。壁から床、窓ガラスやサッシを古いタオルで磨いていくのはかなり骨が折れた。二十一世紀なんだから、手間をかけずにさ

っときれいにならないのかしらん？とテクノロジーに対する不信感が増した。ときどき黒いあいつがカサカサと出てきてひゃっとなった。スピーカーからくるりのメガネが僕の生まれた日は晴れていたとか歌っているのが聞こえていた。

一休みすると、手と腰がきしきしと痛んだ。私は縁側に腰かけ、雑草の生い茂った猫の額ほどの庭を眺めた。空はどこまでも青く、くっきりこっきりしていた。

徹底的に掃除をしたのだけれど、やはりというかなんというか、劇的にきれいにはならなかった。アマチュア掃除人の限界ここに極まれり。無念。それでもとりあえず引っ越してこられるくらいの状態にはなった。私は住んでいた部屋を引き払い、赤帽に頼んで家財道具一式を運び込んだ。実家に仮住まいをしていたはるまきはカゴに入れて私が連れてきた。こうして一人と一匹の暮らしが始まった。

「そういう妖怪なんじゃないの？」

私がお家にできた染みの話をすると、木村さんはいつものように適当な返事をした。

木村さんは古書店のオーナー、つまり私の雇用主だ。ふらりと店の様子を見に来ては、私の素朴な疑問や無垢な質問に思いつきの返答をして、またどこかに行ってしまう。

どちらかという、木村さんの方が妖怪っぽいのではないだろうかと思いつつ、私は言った。

「なんでも妖怪のせいにするのはもう流行遅れですよ。げらげらぽーですよ」

木村さんは鼻で笑った。

「妖怪は何千年も前からいるんだ。流行なんて関係あるかい」

「妖怪はともかく、私、わりとまじめに悩んでるんですけど」

「おれだってまじめに答えてるんだぞ」

ああ言えばこう言う。口の減らないおちさんめ。

「じゃあ妖怪のせいでもいいですけど、それってどんな妖怪なんですか？」

「妖怪のことなんておれが知ってるわけないだろう？」

この人は自分で言い出しておいて、いつもこうなのだ。投げたら投げっぱなし。まるで砲丸投げだ。

「何かそういう文献とかないんですかね？ 妖怪大図鑑みたいな」

「これだけ本があるんだから、一冊くらいはあるかもな。探してみれば？」

私は店内をぐるりと見回した。

「あるとしたら何コーナーですかね？」

「知らん。店員に訊いてくれ」

私は心の地団駄を踏んだ。このちょび髭め。今度入口の横の棚に妖怪コーナーを開設してやる。私は心に誓った。

妖怪説は後回しにして、翌日私は図書館で古い家屋に関する本を漁った。ひょっとすると、あのしみは柱が劣化している徴候かもしれない。そうだとすると、ある日柱がぽっきり折れて、瓦礫の下からいたいけで可憐な乙女が一人と、不細工な猫が一匹見つかるという悲劇が起きるかもしれない。あまりよい死に方とは思えないのでそれだけは避けたい。

調べた結果、どうやらそういうことはなさそうだった。私はほっと胸を撫で下ろした。

とはいえ、あまり安心もできなかった。しみだと思っていた部分は、いつの間にか大きくなり、いまでは柱全体の変色といった方がいいくらいになっていた。それだけではなく、台所の柱以外にも、和室の長押や壁にまで影響は飛び火していた。

タバコを吸うわけでもないのに、こんなことってあるのかしらん？ 私の疑問は解決しないまま、頭の上をふかふか漂い続けていた。

「言われてみれば、たしかに色は違うけど」和室の鴨居を見ながらしげこは言った。「でも気にするほどのことじゃなんじゃないの？ 気がつかない人は気がつかないレベルだと思うよ」

「でも、私は気がつく人なんだよ」

しげこは眉を吊り上げた。

「もっと気にした方がいいことがたくさんあるんじゃないの？」

そう言うと、しげこは居間に戻り、丸くなっているはるまきを愛でた。正直なところ、しげこは私に会いに来てると言うよりはるまきに会いに来てるのではなかろうか？ 六対四でそうだと思う。

私としげこはカルディで九百九十円で買ったチリ産の白ワインを飲みながら、温め直した春巻きと余り物の野菜を詰めこんだオムレツを食べ、炭水化物欲を満たすためにフランスパンにクリームチーズを塗って食べた。しげこはたったの一切れしか食べなかった。私は四切れも食べた。不均衡。

「もっとパン食べる？」

「いらない」としげこ。

「もっと食べなよ。そんなんだからジャコメッティの彫刻みたいって言われるんだよ」

「そんなの言われてないし」

「いいからもう少し食べなっ」

「いいってば。なんでそんなに執拗にパンを勧めるの？ 田舎のおばあちゃんかよ」

「だって、しげこはすらりとしてるのに、私ばかりふくふくしてたら不公平だよ。しげこももっとふくふくしなよ。篤い友情のために」

「……あんたが痩せればいいんじゃないの？」

「……私はしげこの体を心配してるんだよ？」

「あたしは元気だよ」

「でもその平らなお胸が不憫で」

「……はるまき、あんたの土偶みたいな体型をした飼い主はあたしにケンカを売ってるのかなあ？ どう思う？」

はるまきはしげこの膝の上で目を閉じたまま丸くなっていた。私は思いきり顔をしかめてフランスパンを嚙った。

夜はどっぷりと更けていった。小型スピーカーからはデイヴ・ブルーベック・カルテットの『テイク・ファイヴ』が流れていた。二本目のワイン(オーストラリア産)も半分以上が空いていた。

「ねえ、ちょっと思ったんだけどさ」しげこは頬を赤く染めながら言った。

「なんだね？ 茂子くん。なんなりと言ってみたまえ」

しげこはちょっとむっとした顔をした。

「ほら、あんたが気にしてたしみというか変色みたいなものってさ、ひよっとすると、味なんじゃないの？」

「あじ？」

「そう」

「魚の？」

「それは鰹。そうじゃなくて味」

「ちょっとなに言ってるかわからないんですけど。しげこ、酔ってる？」

「酔ってないよ。いや、酔ってるけど、ちゃんと頭は働いてるよ」

「しみとあじ 話が見えない 続けてよ」

一句できてしまった。自分の才能が怖い。

しげこはぐいっとワインの残りを飲み干した。

「だからさ、ひよっとすると、この家にできてるしみだか汚れだかは味なんじゃないのかなって思ったわけよ。ほら、ジーンズみたいにさ。ジーンズって履き古していくと、色が落ちていっていい感じになるでしょ？ それと同じことが家レベルで起きてるのかもよ」

私はトースターで炙ったマシュマロをくわえながら耳を傾けた。

「つまり、このお家が私色に染まってきてるってこと？」

「そうそう」しげこは手酌でワインを注いでから続けた。「ほら、汚れとかってそういうところがあるじゃない？ ジーンズの色落ちとかダメージだって、見方によってはただの変色と劣化だけど、そのへたり具合を味と捉えると、いいものに思えてくるわけだし。歴史的建造物とかもそうでしょ？ 古い建物って味わいがあるからさ。家だって人だってそういうものかもしれないよ」

「ふうむ」

私は首を捻った。わからなくはないけれど、思わず膝を打つほどでもない話だった。なんだかどんちを聞かされたみたいな気分だった。

「そうだとすると、私はどうしたらよいのかしらん？」

しげこは澄まし顔で言った。

「どうもしなくていいんじゃないの？ 気にしなきゃいいんだよ」

「結論一緒じゃん！」

しげこはからからと笑った。つられて私も笑った。

なんだか役に立たない説だったけれど、そういう見方も悪くないかもしれない。いつか画期的なお掃除用品が発売されて、簡単お手軽にしみがとれるとか、この家の老朽化が進んで立て替えるより他はなくなるとか、そういう風になるまでは、ひとまずそういうことにしておこうかしらん。

私はぐいっとワインを飲み干し、グラスを置くと、しげこにもたれかかって、はるまきごとぎゅっと抱いた。小さく床が軋む音がした。しげこは暑苦しいと言わんばかりに私の顔を両手でぎゅっと挟み、アッチョンブリケにした。はるまきは迷惑そうに小さくにゃあと鳴いた。

(了)